

## 論文要旨

古代氏族とその祭祀の研究―越前地方を中心に―

角 鹿 尚 計

日本古代の氏族の研究において、独創的でやや学際的な手法による論考の必要性和、福井県という地域の古代史研究者としての使命を感じ、地域・地方をフィールドとしたテーマを選択して考察を試みた。また、現存する日本最古の漢詩集『懷風藻』を古代氏族の研究資料として捉え、その可能性を考究した。

第一編では、古代越前の在地氏族として奈良時代広大な東大寺領莊園を運営し、且つ足羽郡の郡領を輩出するなど、有力な立場にあった生江氏と足羽氏に注目し、その氏神の特に祭神考証を中心に考察した。また、両氏族出身の郡領、生江臣東人と阿須波臣東麻呂の活躍を東大寺領莊園関係文書などの文献により明らかにした。次に越前の氏族の動向と祭祀をみる上で避けては通れない継体天皇関連の信仰形態、越前国を代表する名神大社気比社とその摂社角鹿神社と氏族との関係、国府武生の地をめぐる論争を取り上げた。

第一章では、越前に蟠踞した少数の地方氏族である阿須波（足羽）共に同族とみる。氏と生江氏の動向と祭祀に注目し

た。その第一段階として式内比定社(旧県社)として現在も地域と地域を超えた広い崇敬を聚める足羽神社の原祭神は如何なる神かを伴五十嗣郎氏と杉原丈夫氏、それに加えて白崎昭一郎氏の論争を起因に考察した。その手法は足羽神社の縁起書の変遷と近世地誌類の記述を詳細にみて、原祭神を坐摩神とする説、坐摩神と継体天皇の生祀霊とする説、継体天皇のみとする説に分類し各説に検討を加えた。その結果、何れの説も文献的確認には乏しく原足羽神社の祭神考証はその特異な社号を以ってなされるべきことを主張した。そして同社の鎮座する足羽山に広がる古墳群の被葬者・司祭者と笏谷石文化、「東大寺文書」や『続日本紀』など国史にみえる足羽郡の有力氏族だった足羽氏の存在に注目し、その関係を考察した。一方で阿須波神の祭神考証も詳細に行い、この神が信仰形態として漢神的性格を持った帰化蕃神系の神であるとし、波比岐神との関係から帰化系の神から宮比神として転換していったとした。「アスハ」の語源にも一試論を呈した。結論として足羽神社の原祭神は、足羽氏の氏神とみられる座摩五神中の一柱、阿須波神とし、司祭者足羽氏の衰退とともに、在地の継体伝承や支配の影響を時代ごとに受けて現在に至っているとした。

第二章では、足羽氏とともに、越前北部在地の有力氏族生江氏について論じた。『続日本紀』や「正倉院文書」「東南院文書」等文献に散見する生江氏の人物と動向をまとめ、特に

生江氏の最有力者として著名な生江臣東人による「越前国足羽郡大領正六位上生江臣東人解」にみえる奉祀氏神社の比定を試みた。

また生江氏の氏神としての祭神を土地の伝承などから考察し、継体天皇の治水伝説もふまえて龍または蛇神と云った農耕治水の自然神ではないかとした。

第三章では、第一章・二章で論述した足羽氏と生江氏の足羽郡・坂井郡内での東大寺莊園経営をめぐる勢力争争について東大寺領庄園関係文書を中心に詳細にみた。そして生江臣東人と阿須波臣束麻呂という二人の足羽郡郡領に着目してその氏を率いたとみられる勢力抗争を中央政府における政争と対応しつつその過程を整理した。次に足羽氏と生江氏の盛衰と祭祀の実状を推考した。

付論では、「越前における東大寺領莊園の人々と文字」と題して、主に第三章の内容を補完した。第三章内容のあくまでも参看である。

第四章では、継体天皇出身とその背景にあった有力氏族の存在と関係について、出身近江説と越前説に大きく二分化して今日まで論究されてきた。そのうち両説の論旨の一つとして継体天皇とその近親者を祭神とする神社の存在がある。本章では、石橋重吉・斎藤与次兵衛・杉原丈夫・白崎昭一郎・中司照世・大橋信弥・水谷千秋の各氏の見解を踏まえた上で全国の神社に奉祀されている継体天皇とその近親者を祭神

とする神社について分布をまとめ、次いで地域・祭神ごとに実態と信仰の現状を調査して考察を加え、結論として石橋重吉氏や八代国治氏の古代における天皇霊を祭神とする例がなかったのではないかとする見解を再確認した。

第五章は現在の氣比神宮の境内摂社角鹿神社の初卯祭に注目し、その神事の由来、意義を通して、氣比神宮(氣比神社)と角鹿神社・常宮神社の縁起と祭神、奉祀氏族の角鹿氏、とりわけ神功皇后との関係をまとめてみた。

第六章は、平成十一年一月の水野和雄氏による越前国府敦賀比定説提唱(「越前敦賀の復権」敦賀市立博物館『紀要』第一四号)が話題となり殊に当時の武生市(現越前市)を中心に大きな反響となったため、氏の論文とその下敷とみられる昭和四十年の『芸林』に掲載された山田弘通氏の論文の論旨を整理して検討を加え、敦賀所在国庁説、国庁移動説及び国庁敦賀支所説の成立は極めて困難なことを論証した。また本論文のテーマである越前在地氏族の動向に留意し、『催馬楽』の「道口」他の歌謡より考究した武生氏の存在と出自などについて試論を提唱した。

付論「越前国府比定地「武生」という佳字について」は、第六章の補論である。これは第六章で取り上げた水野和雄氏の「越前敦賀の復権」に続いて発表された同氏『越前敦賀の復権』執筆その後(『福井考古学評論』第一一輯)についての反論である。特に「武生」という地名について美称(佳

字)説を提唱している。

第二編では、客人神やその他の神の中央と地方における受容と祭祀そして司祭者としての氏族の多様性を論じた。

第一章では、平安時代において遷都以降官祭の一つとして齋行された園韓神祭の成立時期を『日本三代実録』『日本文徳天皇実録』『儀式』の記事を整理することによって『弘仁儀式』より『貞観儀式』までの時期に成立したとする。『儀式』『江家次第』などの記事によりその儀式内容を明らかにし、宮内省に坐す神としての園韓神が地主神であり帝王守護の神として信仰されていたことを指摘した。語源についても触れ、客人神とみて、その奉祀氏族の特定を大年神系譜などから秦氏とした。『大倭神社注進状』『元要記』にみえる「園韓神社」は現奈良市の「漢国神社」であるとしつつも官祭を行なった園韓神社とは縁起・成立は全く別のものとみた。この章では、宮内省に座す王朝守護の園韓神は、実は帰化系の有力氏族秦氏によって持ち込まれ、私祭より官祭の神として変遷していったものであろうことを論じた。

第二章では、原神道の成立過程における事件として『皇極天皇紀』にみえる常世神事件を取上げて国家が享受し得なかつた他の信仰との交渉についてその実態と意義を考察した。まず古代における淫祀(禁断の信仰)として文献にみる記事をまとめ、次に『皇極天皇紀』三年(六四四)秋七月条にみる

常世神事件の記事を紹介して、上田正昭・高取正雄・下出積興・中村修也各氏の見解をみて、「常世神」の種の比定を試み、書紀の記述を縷々考察して、その種を小西正己氏がその著『古代の虫まつり―謎の常世神―』(学生社)で強く主張する「ヤママユガ」では無く、アゲハチョウ属に比定した。常世神事件の関係者についても、主唱者 大生部多と祭祀者の巫覡について、熱烈な仏教徒としての秦河勝の信仰、常世神の正体と性格についても考察し、この事件の意義を「橘を神籬とみた原神道の基盤のうえに、その聖樹を媒介として少なくとも大化前代期までの氏族や民衆が基層信仰の一つとして根強く存在していた鳥信仰と蛇信仰を「蝶」の変態を利用して結びつけた「常世神」なる新興の神を核として、そこに民間道教的な期待が付加された総合的信仰現象」とみた。

第三章では、越前・加賀・美濃に跨る日本三名山の一つ、霊峰白山の開山者としてあまりにも著名な泰澄大師の出自について、泰澄のみならず白山信仰という宗教世界にとって、最も重要で基本的なテクストとみられる『泰澄和尚伝記』を詳細に読み、泰澄の出自について論究した。その手法の基本としてまず古代越前の地域個性を五項目掲げた。次に泰澄の出自についての先行研究を抽出し、六項目にまとめたうえで、出自に関する私見を述べた。すなわち「泰澄は、朝鮮系の帰化人またはその近親子孫であり、河川の運輸に関係した新姓の氏族であった。父方は日野川系、母方は九頭竜川系の水運

に関わった在地の帰化系氏族の出身であった。泰澄の氏族の信仰は韓神であり、そこに修験道や在地仏教と融合した反体制的僧として白山を開山した。」と結論づけた。また、泰澄とその父の名についても試論を陳、泰澄の名の訓からの創意とみた。

第三編では、奈良時代の著名な古典籍であり、現存する日本最古の漢詩集である『懷風藻』を古代氏族研究資料として捉えてみた。すなわち氏族の動向と伝承を知る文献の一つとして取り上げたのである。

第一章では、撰者未詳のまま史料による限り江戸時代初期より論争が繰り広げられている撰者説を紹介した。特に有力な撰者説として知られる淡海三船説や石上宅嗣説については最近の研究も加筆している。次には諸説について検討と批判を陳べ、次に『懷風藻』より読みとれる撰者の条件を挙げ、その条件に最も該当する人物として長屋王の子、安宿王を撰者に比定した。

第二章では、『懷風藻』の成立時期について、田中卓氏が用字用語の指摘により、成立年代に疑問を呈せられたことについて、諸本研究を踏まえて来た筆者の見解は、写本の系統が惟宗孝言の奥書を有する一系統なのに伝本と異同が多いために問題があることを指摘し、成立年代は序の天平勝宝三年十一月として扱うべきことを述べた。次に『懷風藻』撰者

の立場が、近江朝偏重か反近江朝偏重かという従来の指摘について撰者は、近江朝偏重か否かという単純な立場では無く、その成立背景には当時の政争が反映しているとみる。その上からも撰者安宿王説を補強した。

第三章では、『懷風藻』の奈良時代から平安時代への流传をみた。その中で『懷風藻』名称に留意し、平安時代の漢詩集の名称に唯一「藻」の字を使用する『本朝麗藻』の存在を指摘した。そしてその撰者高階積善の氏の始祖が安宿王であるという論旨によりその関係が氏の遺風を伝えるものであったとした。流传についても一方では、『懷風藻』を書写した惟宗孝言が、堀越光信氏の研究により編纂に参加したとみられる『扶桑略記』に、『懷風藻』にしか異伝がない大友皇子立太子の記事があることに注目し、『懷風藻』は『扶桑略記』編纂材料であり、孝言が『懷風藻』より『扶桑略記』に伝えたのではないかと推考した。また、詩賦の興りを大友皇子とする記述がある『今昔物語集』もこの異伝を『懷風藻』から得たのではないかという指摘を行ない、『懷風藻』が影響を与えたのではないかという流传についての試論を開陳した。